

ひなげし

池松 孝子

春先から初夏にかけて、街路樹の下などにひなげしが目につく。初夏の日差しに薄紙と見紛うような透き通る花びらが風にふわふわと揺れる。その繊細さに心惹かれる。ポピー、虞美人草、コクリコなどの名でも。この花は可憐な風情に似合わず、こぼれ種で増えていくほど繁殖力は強い。ヨーロッパでは、小麦畑に生える雑草と嫌われていたという。

ひなげしは次々と咲くが、一日花で切り花には向かない。娘が小学生の頃には「家庭訪問」があった。その前日、ひなげしで先生をお迎えしようと玄関に生けた。翌日、見ると十本以上のポピーがすべてぐったり。これほどまでとは。

先日、昭和記念公園に出かけた。ひなげしの大群生地として知られる。百八十万本以上の花で一面、真っ赤な海だった。傘をさす母親の元をはしやぎまわる子供達の様子を見て印象派巨匠クロード・モネの「散歩、日傘をさす」や「アルジャントウイユのひなげし」を彷彿とさせられた。パリ北西のアルジャントウイユ草原ののびやかな光景だ。日傘を手にした母親、その傍を花を手に子供が歩く。赤い花、白い雲、青い空の対比が印象的だ。パリのオルセー美術館が思い起こされる。

また、虞美草の由来は楚の武将、項羽の愛人「虞姫」にある。漢の劉邦との戦いで自害した。そのときの血がこの花になったという説や、彼女を葬った墓にこの花が咲いたという説がある。イギリスでは赤いポピーが第一次世界大戦の犠牲者の象徴とされている。なぜこの華奢な花が世の東西を問わず血、墓、大戦の犠牲者と繋がっているのだろうか。

明治四十五年五月、情熱的な三十四歳の与謝野晶子は子供を残して、フランスに遊学していた夫鉄幹を追った。シベリア鉄道を經由して二週間後、パリ北駅に到着した。時は五月、パリ郊外にはひなげしが咲き乱れていた。その燃えるような赤いひなげしに夫と再会できた喜びを重ねた。

ああ皐月 仏蘭西の野は 火の色す 君もコクリコ われもコクリコ

与謝野 晶子